

【要約】

博士論文 2016 年度（平成 28 年度）

大学と地域の協働による循環型学習

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科

市川 享子

博士論文要約

大学と地域の協働による循環型学習

The Model of Community-University Collaborated Learning Cycle

地域社会に生じている問題に取り組み、その経験を通して学びを深める大学教育が求められている。本研究は学生が活動において繰り返しおこなう「リフレクション」において、学生と地域の当事者がどのように地域社会の問題を発見し、問題解決につながる状況を導いたか、「創造的リフレクション」という概念を用いて論じた。その上で、「創造的リフレクション」が生成される場の構造を解明し、大学と地域の効果的な協働モデルを提示する。これにより、大学と地域の協働による問題発見・解決学習の構造を明らかにし、地域社会の持続的発展と学生の主体的な学びの好循環を生み出すためのプログラム開発に必要な知見を明らかにした。

第1章は研究の背景と目的、先行研究の整理、本研究の位置づけ、本論文の構成から成り立っている。まず研究の背景と目的を明確化し、続いて先行研究と本研究の位置づけを整理した。学生の地域社会への貢献活動を通じた学びに関する先行研究には、ボランティア学習やサービス・ラーニングに関するものがあり、そこでは学生の貢献活動を通しての学びについて活発な研究がある。本研究は既存のボランティア学習論やサービス・ラーニング論を踏まえ、それを発展させて研究を進める。学生がどのように問題を発見し、解決できるか、またそれを実現する大学と地域の効果的な協働モデルに着目するものである。本研究の位置づけと特徴は、第1に学生がどのように問題を発見し、解決できるかを明らかにしようとするものであり、大学や学生は、地域社会の当事者の潜在的なニーズをどのように発見し充足するのか「創造的リフレクション」を生成する場をめぐって解明していく。第2に、そこで生成される学習とは、既存のサービス・ラーニングとはどのように異なるのか、問題解決過程としての学習とはどのようにものか提示する。さらに第3に、問題が発見され解決される場を大学と地域がどのように設定していけばよいか、大学と地域の協働の場のあり方について提示していく。第1章のまとめとして、これらを踏まえた上で、本論文の構成を提示した。

第2章では研究対象と方法を示した。研究対象としたのは、東日本大震災で被災したB町におけるA大学とその学生による復興支援活動である。A大学による復興支援活動は、災害ボランティアセンターやNPOといった団体に学生を送り出して一方向的に支援するのではなく、地域に直接関与しながら復興過程に継続的に関わるもので、5年以上にわたる長期的なものであった。本研究では継続して取り組まれた5つのプロジェクトのうち、「子

ども支援」、「アーカイブ作成」の2事例を選定して研究を進めることを示した。また研究方法としては、公表された記録と活動に参加した学生からのインタビューを主に用いた。これは、筆者が最初からこの活動を研究対象とすることを想定していなかったからである。この活動に長く関わるうちに、この活動で展開されている深いリフレクションがどのような条件のもとで起こるのかを明らかにしたいと考えるようになった。

第3章では、B町における復興支援活動におけるリフレクションの記録とそれを補足資料としたインタビューをもとに、「創造的リフレクション」の生成過程を分析し、「当事者の潜在的なニーズの発見を支援し、同時にその充足に向けて枠組みを提示し関与すること」とは具体的にどういうことであるのか、なぜそれが深い学びに結びつく創造性を有するのかを実証的に明らかにした。このことから、大学における中間支援機能を果たす機関がどのような「場」の形成に関わるのか、地域と大学の協働による問題発見・解決学習をどのように支援するべきかについての知見を得た。

第4章ではこれまでボランティア学習やサービス・ラーニング研究において蓄積されてきたリフレクションに関する研究成果を踏まえて、第2章で示した対象におけるリフレクションと活動領域の属性との関係という側面に焦点を当てて、学生の深い学びを導く創造的リフレクションを可能にする「場」の構造を明らかにし、大学ボランティアセンター等の中間支援機関が「場」の設定にどのように関わる必要があるかという仮説を生成した。また、本研究の特徴を整理して述べた。最後に、本論文の結論として「大学と地域の協働による問題発見・問題解決学習」の実践に向けて具体的提案を行い、「創造的リフレクションの構造」、「大学と地域の協働による問題発見・解決」、「大学と地域の協働による問題発見・解決学習」、「問題発見・解決を促す大学と地域の効果的な協働の場」を実現することが大切であるとした。

本研究から得られた知見は、以下の4点である。

第1に、本研究はこれまで「学習する主体」に限定されていたリフレクション理論を拡張し、場において、当事者の潜在的なニーズの発見を支援し、充足に向けて枠組みを提示して関与することを目指して行うリフレクションを「創造的リフレクション」と概念化した。

第2に、大学と地域の効果的な協働の場についての知見である。場とは「一定の共同性を有する地域社会を背景にもち、公的性格を有する地域内の責任主体と大学が見守るなかで、当事者のニーズの明確化と充足を支援する学生ボランティア活動が展開できるように形成された活動領域」である。専門システムを基盤にした場の形成は、その場で発見される当事者ニーズに枠組みが与えられししまう可能性がある。場の本質が開花し、問題発見・解決が促される場とは、当事者と協働で形成され、なるべく専門システムを基盤にせず、できるだけ地域社会の共同性に近いところに設定される場である。

第3に、当事者ニーズとは、社会福祉領域におけるニーズ論 (Bradshaw,1972) に対峙する概念であり、専門システムに依拠した規準でニーズとその充足方法を規定せず、当事

者と学生ボランティアで探索され、双方向の関係と交渉の産物として、発見・充足される構造を有するものと位置づけた。

第4に、大学と地域の協働による問題発見・解決学習とは、当事者と学生がともに新しい問題の捉え方を模索・発見し、新しい解決方法を見出すという、協働性と循環性を備えた生成的な学習である。